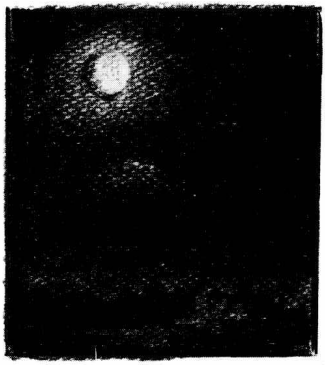
生還

石原慎太郎

新潮社



生還

石原慎太郎

新潮社

生還（せいかん）

一九八八年九月三〇日　発行
一九八九年一月一五日　七刷

著者　石原慎太郎（いしはらしんたろう）

発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一　振替東京四―八〇八
業務部〇三(三二六六)五一一一　編集部〇三(三二六六)五四一一

定価　一二五〇円

印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社

©Shintarô Ishihara 1988, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-301505-5　C0093

生還＊目次

生還……5
院内……161
孤島……189

装画＊高山辰雄

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

生

還

生還

私が体に異常を覚え出したのは、父親の七周忌を終え、私が四代目として継いだ木原薬店を木原製薬と名前を変えて三年目、ある動物性の生薬を元にした健康薬品で当りをとった頃からでした。

大学を卒業してから五年間勤めた商事会社から専務として家業に戻りましたが、その翌年父親は新製品の発売で目算を狂わし三億五千万の不渡りを出しました。一族を挙げて返済に腐心しましたが、家業を預かって以来彼なりに社業を伸ばしてきた父は、その挫折ですっかり自信を失くし、健康まで損ねて翌年には亡くなりました。

その後、母親と母方の実家の手助けも仰いで、悪戦苦闘しなんとか返済を果して、薬業を再開しました。

外国のパテントを買って造った、ちょっとした薬性化粧品が予想よりも良い売行きを示し、息をつけそうになった途端、大学時代からの親友だった男に手形を盗まれ、それが暴力金融に廻ってまたいらざる苦労を強いられました。

その後、生薬の健康薬品でようやく大当りをとり、会社の新しい基盤も出来たという自信も湧

いてき、いよいよこれからという頃でした。

失敗につれ成功につれ、それぞれ形を変えたストレスが家業に戻ってからの十年近くつづいて来たことは確かです。過激な競争の場だった商事会社とはまた違って、小さくとも一社を預かる立場の責任は別のものでした。

まだ四十そこそこの年齢ながら、時々一日の仕事を終えた後、今までに感じたことのない疲れを覚えることがありました。疲労は全身というより、いつも凝ってこわばったように背中にかかって感じられました。別段気にもせず、自家製の健康薬と酒を飲んで通しましたが、それで翌日疲れが拭われている日も、二日三日背中の凝りが続くこともありました。そんな時には夜飲む酒の量をふやしてしのいだものです。

しかしその内、背中の凝りは前に廻って胃にかかり、夕方の空腹時、痛みが感じられるようになりました。

新製品の売行きは会社の側からすれば画期的なもので、そのために新しい工場を一つ山梨県にも造りましたし、今まで手がけたことのない派手な媒体を通じての宣伝ものしました。事業は順調にふくらんでい、その自信と満足が私を健康に無頓着にさせたといえます。

だが胃痛は、僅かずつだが確かにその度を増してき、医者の不養生に近く、薬屋ながら殆ど売薬も飲まず医者にもかからずに過しました。それに痛みは酒を飲むと確かに消えましたし、もともと好きだった酒はその意味でも重宝ではありました。

しかし何ヵ月かすると痛みはビールやウィスキーでは消えなくなり、何故か同じ酒でも、人肌

に燗をした日本酒だけが効果がありました。

その日の夕方、見知りの田沼教授が会社を訪ねてきた時も、食事にはまだ間がありましたが、いつものその頃やってくる痛みを抑えるために私は秘書に命じて燗をつけた酒を運ばせました。

「もう今から酒を飲むのかね」

田沼は咎めるというより訝かしむように質し、

「ええ、胃の痛みには結局こいつが一番よく効きますんでね」

私は笑ってみせました。

「しかし、そいつはあんまり利口な方法じゃないな。人間て奴は時々勝手に馬鹿をするが」

日頃、口の悪い田沼はにべもなくいいました。

「しかし先生の専門は人間じゃないんでしょう」

「動物には胃痛などないよ。よしんば何かで痛くなったら、彼らは治るまで飲みも食べもしない。結局それが一番だ」

田沼は東京獣医畜産大学の教授をしてい、専門は生化学、家畜の飼料に関わる微生物学でした。先代からの縁で、事業にも関わりある化学薬品業の母方の実家とも関係があって、そちらからの援助を受けた研究もしてい、私の父親の死後も会社に出ていた母親に時折何か話を持ちこんで来たりはしていました。

このところの往来は、木原製薬の新製品の成功を聞いて、自分が動物の飼料のために手がけて

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

いるある薬品を、転じて人間の健康のためにも役立てられる筈だ、ということでした。思いがけぬ成功に自信を持った私にとっては、聞く耳をもってもいい提案には思えましたが、計画にはまだひとつ話が杜撰なところもありました。

田沼は最初は話を私の母親のところに持ちこんでいたようですが、私の成功を目途に一線から退いた母親は、私に取りついだのです。

その時も、母親は、

「あの人のいうことはよく聞いたほうがいいわよ。何なら伯父さんにも聞き合わせたらいい。悪い人じゃないが、でもいろいろ評判のある人だからね」

といいました。

いつ頃からの縁かは知りませんが、木原家と母の実家の取り巻き、というか一種食客のような学者で、田沼の噂は時折私も聞いてはおりました。かつては画期的な飼料の開発を手がけた実績もあるが、その折にも、どこかから他の目的で引き出した金をその研究に使ってしまって、金銭上の問題を起したこともあり、それが田沼の成功を相殺した様子がありました。

死んだ父よりも年配の田沼は、初めは私を子供扱いしていた節がありますが、最近は少し態度が変って私を会社の名実の責任者として立ててものをいうようにはなっていました。

いろいろ評判は聞いていましたが、私は時折会社にやって来、いくばくの小遣いなり、研究費のつなぎを手にして帰るこの男が嫌いではありませんでした。

金には杜撰とはいうが、年中同じ暑苦しいツイードの三つ揃いを着こみ、胸元のポケットには

厚い金属縁の眼鏡をさしこんだ、ぶっきら棒にずけずけともものをいう田沼には、世間の評価は別にして、自分の専門への自負と、それがもたらす信念の潔さのようなものが感じられました。いずれにせよ、世間ではそうは見かけぬ人物でした。

一寸の間黙ったままでしたが、思い直したように向き直ると、訪問の用件かと思ったら、

「いつからだね、胃の痛みは」

改めて問われて、専門は違っても相手が一種の医師だけに、問われるまま私はことの経過を話してみせました。

ともかく誰か他人に、自分が抱えているものについて話すのは初めてのことでした。話しながら私は、自分が実はどこかでなにかを怖れているのを感じていました。感じながら、自分がそのことを覚るのに時間をかけすぎたのではないかと焦るように思いもしました。

それを見通したように、聞き終った後、田沼は専門家の無表情で、

「医者には見せたほうがいいな」

簡単に、しかし断じるようにいいました。

「そこらの町の医者じゃなしに、ちゃんとした病院の方がいいよ。それぞれ得手不得手はあるが、そのくらいのことならどこでも同じだろう。必要ならば、私から紹介してもいい」

その後、言葉を選び直すように、

「急ぐこともないが、いつまでも先へ延ばすことはない」

依頼した通り、翌々日田沼から紹介状がとどき、次の週明け私は第二協立病院にいって診察を受け、さらに翌日胃カメラを飲みました。撮影後担当の医師は、こじれた胃炎ではあるが、小さな潰瘍もあり、薬物で治療するか或いは切るか、どちらでも可能と思われるので、仕事の都合もあるだろうから田沼氏と一度相談されたらどうか、と告げました。田沼には後刻詳しい説明をしておくからということでした。

「どの程度のものなんでしょう」

聞いた私に、

「今いった程度のものですよ。ただ、あなたの胃が健全であるということだけは決してありませんからね。大分無茶をされたようですな」

笑いながらたしなめるように医師はいいました。

翌日田沼から電話がかかり、協立病院からの報告は受けたが、正直いって医師も治療の方法の判断をつけかねているので、君も一層決心をつけにくかろう。念のため、K大病院の内科に改めて依頼をしたので、是非もう一度そちらで診断を受けるようにとのことでした。

K大でも、医師は協立と全く同じことをいいました。そして翌日、田沼はまた電話をして来、後もう一度T大病院へ廻るように告げました。

その週末大事な所用があって私は大阪へ出張し、T大での検診は翌週末となりました。しかしその間体の調子に、私自身がはっきりと覚れるような大きな変化があったのです。

続いて二度の胃カメラでの検診がどんな刺激になったのか、胃痛がまし、何故か最早それを酒

で抑える気がしませんでした。そして、大阪の宿で私は重く厚い痛みと吐き気に襲われて吐きました。

痛みは突然胃の腑一杯を占めて、私の意志とは全く関わりなしに胃袋の内側から何か巨きな掌で私の全身を捉え引きずり廻そうとするようにうごめいて感じられました。抗がいようもなく、胃の腑の内にあるものに、内側から突き飛ばされたようにして私は吐いていました。

発作の過ぎた後、洗面台に吐き出したものを眺めながら、私はようやく生れて初めて恐怖をこめた焦りを感じていました。何か全く未知なものが、しかし確かに、自分にせまってこようとしているのを感じながらどうすることも出来ぬ自分に初めておびえ焦り、眩暈を覚えながら片腕で洗面台によろめく体を支えていました。

その夜一晩中怖しい夢を見つづけました。最初は何か目に見えぬ巨きな手が、私の首をつかんでしめつけて来る。息苦しさに抗がってその手を外そうとするのですが、全く手応えがない。する内その手は首だけではなしに、体全体を包んで押しつぶそうとして来る。

声を挙げて助けを求め、夢の中でその夢からだけ醒めてみると、今度は何かに金縛りになったように身動き出来ぬまま、私は辺りを音を立て踏みしだいて過ぎる象の大群の中に放り出されていました。おどろに轟く象の足音の中で自分の叫び声を聞いてはいても、それが彼らの耳には一向に達しない、ある象はその足でかろうじて私の体をまたいで過ぎ、ある象の足は仰向いて倒れている私の耳元に落ちました。

象たちがようやく通り過ぎていった後、今度は私の体はじとついて何やらうごめくものに満さ

れた小さな穴の中に陥ちこんでいました。気づいて見ると、私の体の周りに大小無数の蛇がのたうち廻っている。蛇は体の外だけでなく、私の体の内側からも湧き出していました。胃の腑の中から這いだした蛇が、内臓の中を這い廻り、そのあるものは食道を逆上って喉から眼窩の中に入り込もうとしている。叫ぶにも声が出ない。体の内外から蛇たちは私に食いつきながら押しひしごうとしている。知覚が薄れ全身が冷えきりながらばらばらに解体されていくのをどうすることも出来ず、ただ喘ぎつづけていました。

翌朝、ベッドから半ば落ちかけながら眼を醒ましましたが、それは目醒めというよりは失神からの蘇生に似たものでした。

翌週T大病院で通算三度目の胃カメラを飲んだ後、私は失神したのです。飲みなれぬものを飲む不快感や苦痛だけではなしに、私の意志とは別に、胃の中にある何かが突然それを拒否し、作業を遂げようとする医師たちとその何かの間に挟まれて、私自身が立往生し意識を失ってしまったような感じでした。

その後医師がどんな処置をしたのでしょうか、気づいた時は別室に寝かされていました。次第に戻ってくる意識の中で、私はまず、自分の枕元で話し合う医師たちの声を聞きました。意味は聞きとれはしなかったが、彼らがしきりに私について話し合っていることだけはわかりました。

薄く見開いて見た眼に視界が蘇り、その中で、三人の医師が先刻撮った写真をかざしながら、ひそめ合った声でしきりに何かを論じていました。

私が声をたてたのでしょうか、若い医師の一人が私を見直して仲間へふり返り会話が途絶えま

した。年配の医師が代って覗きこみましたが、その医師の面に浮んだ笑顔が、まがいなくつくりものだと何故かすぐわかりました。意識の戻り目に、彼らに感づかれずに聞いて見とったものの雰囲気が異様なものだったのを私は感じとっていました。

同じベッドで暫くの間寝たまま待たされ、T大の医師は前とは違って田沼教授宛てにしたためた手紙に封をして私に手渡しました。

「これを読んで頂いた上で、御相談になって下さい。余り心配はいりませんよ。さっき気分が悪くなられたのは、時々ショックであいうこともありましてね。大分お疲れのようですから」

先刻と同じ、表情を感じさせぬ笑顔で医師はいいました。

失神したせいか、体全体が放心したように弛緩していました。体で受けとめ切れぬほどの疲労を感じていました。萎えそうになる膝をこらえて歩きながら、だまされてたまるか、と自分にいい聞かせながら必死になって歩きました。

車に乗ってようやく、預かっていた手紙をどこにも収わず握りしめたままでいたのに気づきました。

運転手に行き先を問われ、田沼の居どころの知れぬまま、手紙を握り直して会社と告げました。

会社で秘書に命じて薬罐に湯をたぎるまで沸かさせ部屋に運ばせました。内から錠を下し、田沼宛ての手紙の封の部分を薬罐から立ち上る湯気に晒して乾きかけた糊を元に戻して封を開き、中味を取り出しました。

田沼宛ての手紙には、読み易い書体で何やらドイツ語を混えた簡単な文章がしたためてありま

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo